

新羅国内情勢の動向と恵恭王代派遣の新羅使¹⁾

新飼 早樹子

(ソウル大学校人文大学国史学科博士課程)

1. はじめに ―本稿の目的と問題提議―

本稿の目的は、新羅中代末期のいわゆる王党派と反専制主義勢力それぞれに属する真骨貴族の動向に注目し、新羅がいかなる対外的政策を試みたのかについて考察を加えたうえで、恵恭王代²⁾に新羅が日本へ派遣した同王 5 年 (769)、同王 10 年 (774)、同王 15 年 (779) の新羅使の派遣目的と性格について再考することを目指すものである。当該期の研究に関しては、先学において多くの見解が示されている。しかしながら、韓国史・日本史の分野ではそれぞれ重要視する観点が異なるため意見の一致を見せていない。したがって、韓国史・日本史双方の視点より 8 世紀末の新羅と日本の対外関係について明らかにすることは、歴史の相互理解の一助となると考え、本研究では大きく分けて以下の 2 点について考察する。

第一に、新羅下代の創始者たちは、中代末期に「上古の復帰³⁾」を合言葉として、貴族連合体制の復古を目指していた⁴⁾。そのため新羅下代の創始者たちは、専制王権的な中代の政策⁵⁾に関しては否定的であったという理解が一般的である。すなわちこれは、新羅王位をめぐる国内の抗争や王の交代を王権の専制主義と貴族連合体制との対立のなかで把握する理解といえる。このような反専制主義勢力は、新羅恵恭王代に景德王代より続く漢化政策を否定して、王党派の反乱を鎮圧し、最終的に恵恭王を殺害することで新羅中代を終結させ新羅下代を成立させた⁶⁾。しかしながら通常対外政策は、国内状況と対応して流動的に変化するため、中代的性格を持つ集団⁷⁾と下代的性格を持つ集団⁸⁾の間には、国内政治に対する差異だけではなく、対外的な政策においても違いがあると考えられる。しかしながら、このような観点から新羅国内の対立関係と各集団の対外政策姿勢を関連させ考察した研究は多くない。そのため各政治勢力の動向を中心に直し、詳細な議論のため新羅国内の政局だけではなく日本の国内政治状況も考慮し、恵恭王代の新羅使派遣の政治的意義について検討する。

第二に、新羅は景德王 19 (760) から恵恭王 10 年 (774) まで日本へ 5 回使者を派遣した (次章後掲〈表 2〉参照)。しかし、日本の朝廷はこの全ての使者に「放還」の措置を取っている。このように新羅が日本に派遣した使者は、景德王、恵恭王代を通してどちらの治世でもその多くが「放還」措置となったため、日本の要求する賓礼形式を備えていなかったという側面に注目して論じられた研究は多くみられる⁹⁾。しかしながら、景德王代と恵恭王代では王の代替わりという問題だけではなく、国内の権力構造と社会状況は異なっており、「放還」という性格のみを重視し把握することについては考慮すべき点が残されている。一方、新羅政治史の立場をふまえた研究においても、恵恭王 15 年／宝亀 10 年 (779)

の新羅使が最後の公式使節であるという事実に着目し、使者派遣の断絶あるいは停止という意義を説明するものにとどまっている¹⁰⁾。つまりこれらの研究は、新羅の国内政治動向と対外政策の連動という観点を目的に考察された研究ではない。しかしながら、恵恭王代にみられる新羅使は同じ「放還」の措置を受けた使節であっても、派遣主体の新羅の立場からみると、変動する政治情勢に対応するなかで派遣された使節としての性格を強くもったものではないか。すなわち、先例に従った新羅使派遣という側面よりも、他の性格や意図をもって派遣された使節であった可能性が高い。

したがって本稿では、恵恭王代の新羅使を景德王代の「放還」された新羅使の延長線上に位置付けて考えるのではなく、恵恭王代の権力構造と社会情勢の動向を確認したうえで、新羅の行った対唐・対日政策の展開についても把握し、恵恭王代の新羅使について再検討を促すことを目的とする。

II. 新羅恵恭王代の権力構造と社会情勢

恵恭王代派遣の新羅使について考える前提条件として、恵恭王代の治世がいかなるものであったのか理解しておく必要が求められる。なぜなら恵恭王 15 年（779）の新羅使は、景德王 10 年（752）以来、久しぶりに入京が認められた使節であった（〈表 2〉参照）。そのため、新羅中代末期の両国関係について考察する際、「放還」という一連の立場に注目し理解しようとする研究が多くみられる。しかしながら「放還」という対処は、あくまでも新羅使を受け入れる日本側の外交措置である。したがって、新羅使の派遣主体である新羅側の観点から考察した際、中代末期にみえる新羅使の性格を「放還」という措置のみに注目し、同一の性格として把握することは可能かという疑問が挙がる。したがって、「放還」措置を施した日本側のみでなく、派遣主体である新羅側の国内情勢についての理解も必要となる。そのためにまず本章では、新羅使終焉の年となる恵恭王 15 年（779）までに時期を限定し、恵恭王代の権力構造と社会情勢について考えてみたい。

1) 恵恭王代の国内反乱

恵恭王代の政治的特徴を挙げるとするならば、恵恭王 4 年（768）の大恭の乱をはじめとして反乱が頻発する治世であった。恵恭王代の反乱について『三国史記』巻 9、新羅本紀、恵恭王条の記事をもとに以下〈表 1〉を作成した。

〈表 1〉恵恭王代にみえる反乱一覧

恵恭王（西暦）	名称	史料（『三国史記』巻 9、新羅本紀、恵恭王条）
4 年（768）7 月 ¹¹⁾	大恭の乱	秋七月、一吉澹大恭與弟阿澹大廉叛。集衆圍王宮三十三日、王軍討平之、誅九族。
6 年（770）8 月	金融の乱	秋八月、大阿澹金融叛、伏誅。
11 年（775）6 月	金隱居の乱	伊澹金隱居叛、伏誅。
11 年（775）8 月	廉相・正門の謀叛	秋八月、伊澹廉相與侍中正門謀叛、伏誅。
16 年（780）2 月	金志貞の乱	伊澹志貞叛、聚衆圍犯宮闕。

16 年（780）4 月	良相・敬信の挙兵	夏四月、上大等金良相與伊滄敬信舉兵、誅志貞等、王與后妃、爲亂兵所害。良相等謚王爲惠恭。王元妃新寶王后、伊滄維誠之女。次妃伊滄金璋之女。史失入宮歲月。
--------------	----------	--

まず<表 1>にまとめた『三国史記』新羅本紀の史料によると、恵恭王 4 年（768）7 月に大恭とその弟である大廉の兄弟が反乱を起こし、同王 6 年（770）8 月には金融、同王 11 年（775）6 月には金隱居、同年 8 月には廉相・正門がそれぞれ反乱・謀叛を起こした。最終的に、同王 16 年（780）2 月に起きた金志貞の乱とそれに伴う 4 月の乱の最中に妃と一緒に恵恭王も殺害され、新羅中代王室の系譜は幕を閉じることとなる。このように景德王代とは異なり、恵恭王代は恒常的に内乱が頻発していた治世であった点をまず確認しておきたい。

そのなかでも特に大恭の乱に関して『三国遺事』では、「大恭角干の家が亡んで、家の財産と宝帛を王宮に移した。また新城の倉が焼け、逆党の宝穀で沙梁・牟梁などの里中にあったものを王宮に運んだ。乱は三朔に及んで、賞を受けたものも非常に多く、誅殺された者も無数であった」との記述があることから¹²⁾、大規模な乱であったことが確認できる。このように大恭の乱に関する記事は、『三国史記』本紀だけではなく『三国遺事』恵恭王条や『新唐書』巻 220 新羅伝にも記録が残されている。その中でも『三国遺事』恵恭王条では、条の全てを大恭の乱の内容に当てており、「王都及び五道州郡のあわせて 96 角干が戦いあって、大いに混乱した。」と記していることから、『三国遺事』の理解では、乱が全国規模に及ぶものであったと把握している点が読み取れる。一方、唐の弔慰使帰敬崇が新羅に来た際に記したものと考える『新唐書』巻 220 新羅伝の記事では、「国が大いに乱れ、三年で平定された。」とあり、乱の終結までに 3 年を要したとの理解がなされている。このような乱の期間に関して、『三国史記』では、「33 日」、『三国遺事』では「三朔にわたった」とし、『新唐書』は「三歳ほどで平定」としている。『新唐書』にみられる三歳については、三朔の誤記あるいは同質性の乱と考えられる金融の乱と合わせて計算したものと推論される。また『三国史記』の記述は、実際に王宮を包囲した日数であり、その余波まで含めたものとするならば、『三国遺事』の内容と矛盾するものではないとの理解が示されている¹³⁾。

したがって、各史料において多少の差異はみられるものの、この乱が新羅国内に多大な影響を与えたものとして把握することができ、このような社会状況のなか大恭の乱の後の混乱した状況を救うための政策の一環として「聖徳大王鐘銘」は鑄造されたとの意見も示されている¹⁴⁾。この時期、上述の史料にみるように国内が疲弊していたと考えるならば、国家鎮護のための鑄造であったという点には妥当性がある。実際鐘銘の末尾には、「大暦六年歲次辛亥 十二月十四日」との年紀が記されており¹⁵⁾、この「大暦六年」は 771 年に相当し 770 年に起こった金融の乱の翌年である。後述にて詳しくふれることとするが、この前後の時期は、『三国史記』恵恭王条で災異・怪異関係記事が頻発し¹⁶⁾、国内の混乱が想定される社会状況であったことも考えなければならない。

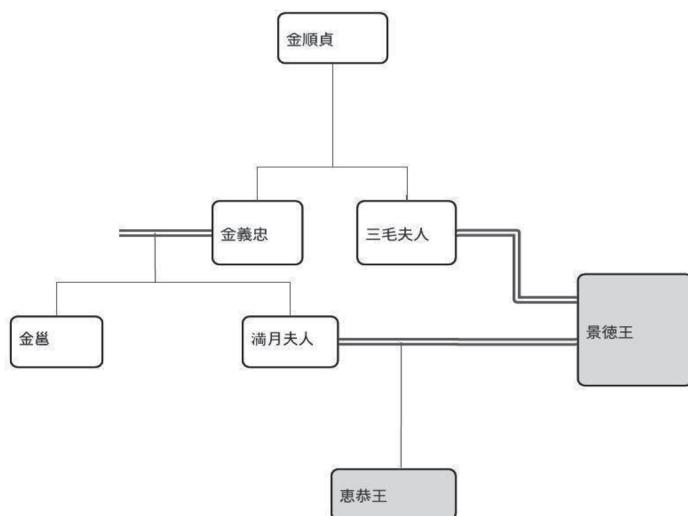
2) 「聖徳大王神鐘銘」と権力構造

このような状況のなか鑄造されたと考えられる「聖徳大王神鐘銘」は、鑄造の背景である新羅の政治

社会について考えるための重要史料のひとつである。以下具体的な検討を進めていきたい。

恵恭王は8歳という幼年で即位したことから、太后である満月夫人が摂政として立ち¹⁷⁾、政治を執り行ったが¹⁸⁾、これは「聖徳大王鐘銘」の内容からも確認できる¹⁹⁾。この「聖徳大王鐘銘」の鑄造経緯について『三国遺事』によると、「景德王は父の聖徳王の威徳を追慕する心情が厚く、そのために発願したが、景德王の治世では完成せずに恵恭王の代に至り完成した」とある²⁰⁾。鐘銘では、恵恭王の誕生と即位を瑞祥で修飾したあとに太后の恩を称揚しており、摂政に関しては、「元舅之賢」と「忠臣之輔」により成立していたと記されている。そのため、この「元舅之賢」と「忠臣之輔」の両者が具体的に誰を指し示すかについては多くの議論がなされてきたが、本章においても一度検討を加えておきたい。

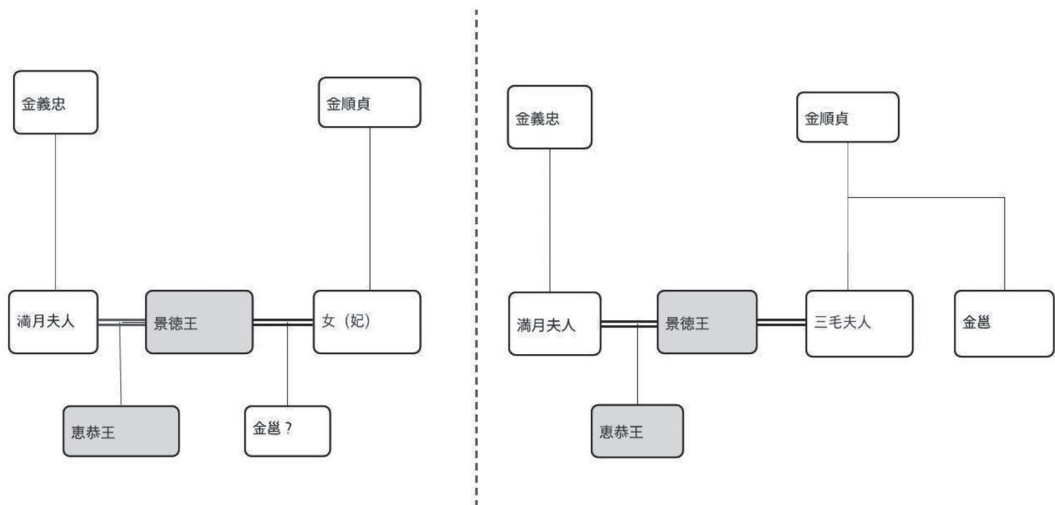
まず「元舅」についてであるが、これは「元舅」という表記から「母方のおじ」という意味であり、満月夫人の兄弟を指すものであると考えられる。だが、史料上より具体的に誰を指し示しているかについては直接の言及がなされていないため、それを確認することはかなわない。しかしながら、当該期の状況より鑄造の責任者は、鐘銘歴名部の筆頭にあたる金邕²¹⁾であると考えられ、鐘銘歴名部には金邕が当時7つの官司の長官を兼任し、上相の位に就いていたことが記されている²²⁾。また、『続日本紀』巻32、宝亀5年(774)年3月条にみえる問答のなかで、新羅の金三玄の返答として「今其孫邕」という表現がみられる²³⁾。そのため、この内容を根拠に史料上にみえる「邕」は、金順貞の孫であると理解し「聖徳大王神鐘銘」にみえる人物と結び付け金邕を示すものであるとしたうえで²⁴⁾、金邕は、金順貞の政治的基盤さえも継位し政治を行った人物であるとの見解も示された²⁵⁾。この見解をふまえて考察するならば、金邕は恵恭王の「元舅」で、満月夫人の兄であり、金義忠の子という関係になる。すると金邕は、金順貞から数えて彼の孫となるため、金順貞—金義忠—金邕と続く3代の家系がみられることとなる²⁶⁾。



<図1> 金順貞—金義忠—金邕が3代続くと考える系図
(金邕は金順貞の血縁上の孫と考える)

また一方で、三毛夫人と金邕の政治活動が同時期であることを根拠のひとつとして、『続日本紀』巻32、宝亀5年（774）年3月条にみえる「孫」の字は、血縁関係のある祖父—孫関係と考えるのではなく、この「孫」字は、「子孫」の意味と把握し、その関係は、父子関係であるとする見解も示された²⁷⁾。金邕を金順貞の子とみる見解は早くより提示されており²⁸⁾、孫とみる理解とは見解を異にしている。

ここで金順貞を含めた関係についてもふれておきたいが、金順貞は聖徳王代に積極的に対日外交を主導した人物で、聖徳王代の権力者であった²⁹⁾。同時に恵恭王の摂政に就いた満月夫人は、金義忠の娘である。そして満月夫人の父である金義忠は、聖徳王代において積極的に対唐政策を推進した人物であった。そのためこのような血縁関係を背景に、金邕は中代的政権に近い王党派に属する人物であったとの見解も示された³⁰⁾。しかしながら、金邕の血縁関係とその系譜の復元³¹⁾に関しては、史料の限界およびその性格から研究者による意見の一致を見せておらず、断定することは難しいと考える³²⁾。とはいえ、恵恭王代に金邕が政治権力を握っていた点については、多くの先行研究にて言及されているように異論はないと思われ、恵恭王の治世において絶大な政治的影響力を有していた人物であったと評価することができる。



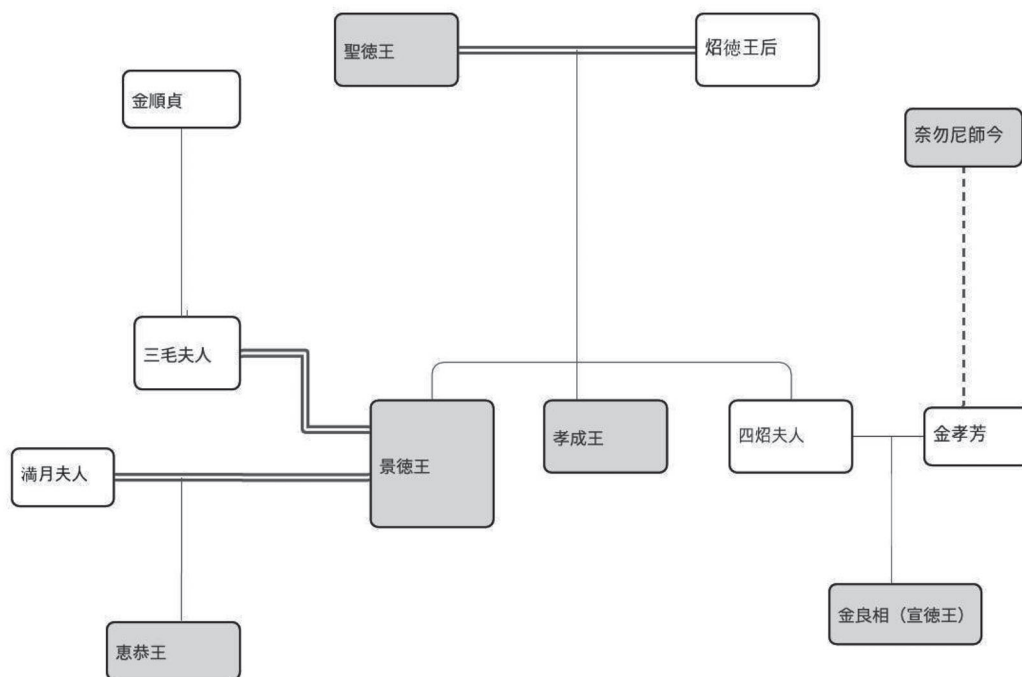
＜図2＞金順貞／金義忠／金邕を中心とする系図

左：金邕は景德王の子で母親を通して金順貞の孫であると考える系図（金邕は景德王を通して男系系譜に連なる可能性を示す見解）

右：金邕は金順貞と父子関係にあると考える系図

続いて、「聖徳大王鐘銘」にみえる恵恭王代の「忠臣之輔」について考えたい。この「忠臣」については、金良相と金体言³³⁾の2名と理解するのが一般的であり、その中でも忠臣の筆頭は、金良相であったと考えられる。金良相は、恵恭王のあと下代最初の王となる宣徳王のことである。金良相は母が聖徳王の女（娘）なので、母を介して中代の王室に連なる人物ではあるが、中代の男系系譜に直接つながる人物ではない。金良相は、景德王23年（764）に金邕の後を継ぐかたちで侍中の任に就き³⁴⁾、金融の乱の後の恵恭王10年（774）9月に上大等の任に就いた³⁵⁾。このような金良相の一連の動きは「聖徳

大王神鐘銘」からも確認でき、恵恭王代には2寺の検校使と官司の長官2つを兼任していた³⁶⁾。このように金良相は、金邕のあとを継ぐようにして恵恭王代を通し新羅執政の中心に位置した人物であった。そのため、景德王代から続く政治的結合関係は、満月夫人の摂政に加えて「元舅」の金邕と「忠臣」の金良相・金体言という既に景德王代には外戚であった金順貞一族を基本として強化されたという見解も見られる³⁷⁾。



<図3>新羅中代系譜復元図

以上の点から考えると、恵恭王代初期は満月夫人と外戚の摂政という状況であるため、幼年の恵恭王が自らの意志で新羅使を派遣したとはまず考えにくい。つまり、王の主導による日本への新羅使派遣というよりは、「摂政」及び「忠臣」による意志のもとに実現した新羅使の派遣であったとみななければならない。そのため、恵恭王代は景德王代以上に派遣主体である新羅国内情勢と権力構造に対して深い理解が必要となる。またこのように恵恭王代は、中代的性格と下代性格を所有する勢力のあいだで抗争がみられる治世である。したがって、恵恭王代の新羅使派遣は新羅の立場から考えた際、時勢が非常に流動的に変化したなかで発遣されていたと考えられ、単純に先例へ従う形式で派遣された使節であったとは考えにくい。それでは、恵恭王代に派遣された新羅使は具体的にいかなるものであったのか。次章では、各新羅使の性格と特徴に注目し詳細な検討を進める。

Ⅲ．恵恭王代の新羅使と対日外交

恵恭王代の対日本への新羅使の実態について詳らかにするためには、恵恭王代の対外政策として最も重要な唐との関係について考える必要がある。なぜなら新羅は8世紀以降、王の代替わり毎に唐の冊封を受けていた。そのため新羅の対外政策という観点から考えた際、新羅は唐との関係を非常に重視していたといえる。恵恭王代においても金隱居が恵恭王3年（767）に王と王妃の冊命を要請するために唐に向かい³⁸⁾、翌年唐の冊封使である帰崇敬が新羅へ派遣されてきた。後に金隱居の乱を起こす金隱居は、この時大いに活躍した人物であった³⁹⁾。このような対唐政策の動きに対し、恵恭王代最初の対日交渉の動きは、恵恭王5年（769）の新羅使である。つまり、恵恭王代の対日政策は対唐政策よりも後に行われたこととなる。このように、即位直後に日本へ新羅使が派遣されなかった理由については、国内状況が落ち着かず実現しなかったとの見解が示されている。もちろん恵恭王は幼年での即位であり、その体制は摂政政治であった。そのため景德王代とは異なり、権力集中を早急に行う必要性があった点は確かである。また、恵恭王4年（768）7月には大恭の乱も起こるので、恵恭王即位後しばらくは国内情勢が安定しなかったという見方については軽視できない。しかしながら一方で、新羅は恵恭王3年（767）時点で唐には使節を派遣しているのにも関わらず、同時期に日本には使節を派遣していない。したがって、新羅が混乱する国内情勢を背景に、新羅の対外政策方針として使節を派遣することができなかった、あるいはその余力がなかったと考える見解には疑問が残る。つまり、新羅の国内情勢が落ち着かないがために、日本に対しても積極的な対外政策・交渉を行わなかったという点に関しては再考の余地があると思われる。つまりこのような点を重視し考察するならば、恵恭王5年（769）以前の段階において、新羅にとってはそれほどまでに日本へ積極的に使節を派遣すべき理由と状況が存在しなかったと見ることも可能である。

2点目に恵恭王代の新羅使を考察するにあたり注意すべきは、遣新羅使・遣唐使との関係である。つまり、日本の遣新羅使の直接の派遣がなく来朝した恵恭王5年（769）と恵恭王10年（774）の新羅使の性格をどのように把握するかという点である。近年特に8世紀の遣新羅使研究の分野では、遣新羅使派遣の前後に遣唐使が派遣されているとの指摘がなされており、遣新羅使の派遣が遣唐使と密接に関わっているとの見解が示され⁴⁰⁾、新羅使の背後にある唐の存在についてもさらに考慮する必要が求められる。既に764年以降の新羅使は、唐の意志が介在した新羅使であったとの見解がなされているように⁴¹⁾、恵恭王代の新羅使を唐との関連を含めて考える必要がある。

3点目に恵恭王5年（769）と恵恭王10年（774）の新羅使はどちらも「放還」の措置を受けている。しかしながら日本側の対応に着目して恵恭王5年（769）と恵恭王10年（774）の新羅使を賓礼という枠組みから把握すると、その内実は大きく異なる。加えて、時間的な観点より新羅国内情勢の立場をふまえて考察した際にも大きな意味があると考えられる。特に恵恭王10年は、政治的変動がみられる時期であり、政治史的観点から考えた場合、非常に重要な年として多くの論考がなされてきた。そのため、恵恭王10年であるこの年に派遣された新羅使をどのように把握するのかという問題は非常に重要な論点となる。

それではこのような疑問点を出発点として、恵恭王代の新羅使について具体的な考察を進めるために、景德王10年／天平勝宝4年（752）から恵恭王15年／宝亀10年（779）まで計7回の新羅使につい

て以下〈表2〉にまとめた。

〈表2〉750年代～770年代にみえる新羅使一覧

新羅年号	日本年号	入京有無	内容
景德王 10(752)	天平勝宝 4	入京	それまでにみない 700 人余りの大規模使節団での来日。新羅使大使のほか新羅王子金泰廉が来日。「買新羅物解」から入京した日付の中で羅日間の交易が確認できる。
景德王 19(760)	天平宝字 4	放還	級浪金貞巻ら（人数不明）が来日。使者が「輕微」なので「賓待するに足らず」として放還措置。
景德王 22(763)	天平宝字 7	放還	級浪金体信ら 211 人が来日。760 年金貞巻に伝えた使者の 4 条件が守られていないために放還措置。
景德王 23(764)	天平宝字 8	放還	大奈麻金才伯ら 91 人が来日し、執事省牒にて入唐僧戒融が日本に帰国したか否かの消息を問う。それに対し日本は、戒融の渤海經由帰国を報告する太政官牒を出す（唐の意思が介在か）。
恵恭王 5（769）	神護景雲 3	放還	級浪新羅大使金初正ら 187 人、先導者 39 人が来日。金隠居に寄託された在唐大使藤原清河・学生阿部仲麻呂の「書状」伝送と付随する形で「土毛」を持参し、「唐国消息」も伝える。大宰府で饗応し、答信物を送るが、760 年金貞巻に伝えた使者の 4 条件が守られていないために放還。書簡伝送の使者→勅使が唐の意思を介在したか。
恵恭王 10(774)	宝亀 5	放還	礼府次官沙浪金三玄ら 235 人、在唐大使藤原清河の書状を持参し来日。「調」ではなく「国信」と称す。太宰府より放還するが、渡海料を支給。書簡伝送の使者→唐の意思が介在か
恵恭王 15(779)	宝亀 10	入京	薩浪新羅大使金蘭蓀ら来日、「賓礼を以て遇される」。遣唐判官海上真人三狩を護送し、学語生派遣。 叙位・当色衣服を賜与され、元日朝賀に参列＝賀正貢調の使節と判断。海上真人三狩の護送を評価するが、外交形式には不満(『続日本紀』)。金巖の知識等を評価し日本残留を望む(『三国史記』)。遣唐使護送が発端で、史料により評価が異なる。

1) 恵恭王 5 年／神護景雲 3 年（769）の新羅使

1、新羅使の実態

まず、恵恭王代初めての新羅使である恵恭王 5 年／神護景雲 3 年（769）の新羅使の実態について考えたい。この新羅使は、対馬嶋へ到着したという記事を最初にその姿が確認できる。史料によると、使節団の構成は大使の級浪金初正をはじめとする 187 人と導送者 39 人からなる総勢 226 人であった⁴²⁾。

導送者という表現は、新羅関係史料において初見の用語であり、具体的な性格および役割の断定は難しい。しかしながら、大使ら 187 人と区分し記され、その人数が 39 人という規模であることから、新羅船の航行と修理などを担当した水手あるいは船工であるとの推測や⁴³⁾、羅日外交に伴い使節団と共に来た交易に従事する民間人の随行集団との見解も示されているが⁴⁴⁾、史料上からその役割を断定するには至らない⁴⁵⁾。また注目すべき点としては、新羅の金隠居に寄託された在唐大使藤原清河と学生阿部仲麻呂の「書状」を持参するとともに、最新の「唐国消息」を伝えている点である。神護景雲 3 年（769）12 月癸丑（19 日）条によると、大宰府で来日理由をたずねられており⁴⁶⁾、新羅大使金初正は、「唐に留まっている遣唐大使の藤原河清と留唐学生^(ママ)の朝衡から日本の縁者（郷親）に届けてくれるようにと書状を託されたので、新羅国王の命においてこの書状を送り届けに来たのです」と述べ、これと一緒に「土毛」を献上すると返答している⁴⁷⁾。

2. 新羅の実態と国情

では次に、新羅使を派遣した新羅の立場で恵恭王 5 年／神護景雲 3 年（769）の新羅使についてみていきたい。書状を唐から寄託された新羅の金隠居は史料上には、「宿衛王子金隠居」と記されている。この宿衛王子とは、唐に派遣されて皇帝近くに務める周辺諸国から来た王子のことを指す。史料上にみえる新羅の宿衛王子の例は、734 年金志廉の後は 806 年の金献忠まで待つこととなるが、この間も宿衛した名族の新羅人は金巖をはじめ、多数確認できる⁴⁸⁾。では、この金隠居はいかなる人物であったのか。金隠居について『三国史記』等の史料から窺える具体的な動向は次のとおりである。金隠居は、恵恭王 4 年（768）に冊封使の帰崇敬らを案内して新羅に帰国した後、同年 10 月に侍中の職に就く。しかしながら、2 年後の恵恭王 6 年（770）には侍中の任を辞し⁴⁹⁾、恵恭王 11 年（775）金隠居の乱に至り失脚することとなる。侍中就任以前の動きをみると、金隠居自身が唐へ赴いていることから、金隠居は唐と関係の深い人物であったと考えられる。このように 768 年から 770 年までのあいだ金隠居は侍中の職に就いており、金隠居が侍中在任中に派遣された新羅使が恵恭王代になって初めて日本に派遣された恵恭王 5 年／神護景雲 3 年（769）の使節であったということとなる。もちろん、外交政策の決定と上大等および侍郎等の関連については既に指摘されているところであり、この時の上宰が金邕であるためこれを根拠とし、恵恭王 5 年の新羅使は金邕の主導により派遣されたとの見解もある⁵⁰⁾。しかしながらこの新羅使は、単純に新羅から日本に派遣された新羅使ではなく、金隠居に寄託された「書状」を送る使者として別の役割を担っていた点を考慮せねばならず⁵¹⁾、金邕のみの主導で派遣されたという理解に対しては再考の余地があると思われる。金隠居に寄託された「書状」の伝送に関しては、冊封を要請して入唐した金隠居らが帰国する際に寄託されたものと読みとれはするが、新羅国王への冊封行に関わる唐朝の冊封使らの仲介も想定できる⁵²⁾。これに関しては、『文化英華』巻 297 錢起「送陸珽侍御使新羅」「重送陸侍御使日本」の詩によると、錢起は副使の陸珽へ送別詩を送っており、冊封使の帰崇敬と共にみえる副使の錢起は新羅使行の後に日本へも使行することが長安を出る際には既に予定されていたとし、錢起の予定された日本行きこそ「書状」の伝送と深く関係していたとする見解も示された⁵³⁾。したがって、このような点を重視するのならば、新羅の背後に唐という存在があり派遣された新羅使であったという点を考慮しなければならない。この点については次の日本側の対応と合わせて考察したい。

最後に、即位5年後である769年に新羅が使節を派遣した点については、国内の状況が落ち着かなかった点を理由と考える見解もあるが、この使者が恵恭王4年（768）7月の大恭の乱の翌年に派遣された使節であることに注目したい。まず恵恭王5年という年は、翌年8月には金融の乱が勃発しており、769年は大恭の乱の終結翌年であったといえども、国内情勢が安定していたとは言い難い。これに関して触れておきたいのが、大恭の乱の勃発による大規模な国内の混乱状況を契機として恵恭王5年に薦挙がなされたという指摘である⁵⁴⁾。『三国史記』恵恭王5年5月条にみえる薦挙者は百官であるが、史料上にみえるこの百官は、官の集団を指すとし、推薦者は一定の官等以上の人事担当官庁の官員であった可能性が高いとの見方が示された⁵⁵⁾。恵恭王5年のほかに史料上にみえる薦挙は、高句麗本紀⁵⁶⁾や新羅の炤智麻立干時期⁵⁷⁾にも確認できるが、統一以後にみえる薦挙に関する史料は恵恭王5年のみで、なおかつ官僚が個別に国王に薦挙することはあるが、国王の命令で薦挙が行われるのは恵恭王5年5月条が唯一であり、このような点からも前代とは異なる⁵⁸⁾。そのうえで勘案すべきは、『三国史記』恵恭王代にみえる災異・怪異記事であるが、これについてまとめたものが以下の<表3>である。

<表3> 恵恭王代の災異・怪異記事

年（西暦）	月	史料内容（『三国史記』巻9、新羅本紀、恵恭王5年まで）
2年（766）	春正月	ふたつの太陽が並んで出た。
	2月	五つ脚の仔牛を産む。康州で地面が陥没し池になる、その水の色は青黒い。
	冬10月	天から鼓のような音が聞こえる。
3年（767）	夏6月	王都地震
	秋7月	三星が王宮の庭に落ちて互いにぶつかり合い、その光は火のようにほとぼしり散った。
	9月	金浦県の禾の実が全て粃穀のない穀物になった。
4年（768）	春	ほうき星が王都の東北方にあらわれた。
	6月	王都で落雷・降雹で草木が傷ついた。大星が皇龍寺の南に落ち、地が震え、その音は雷のようで、泉や井戸はみな干上がった。虎が宮中に入る。
5年（769）	夏5月	蝗が発生して旱魃になった。
	冬11月	雉岳県の鼠8千匹ばかりが平壤に向かった。雪が降らなかった。

前述でも述べたが、<表3>にみるように恵恭王代は災異関係記事が頻出しており、恵恭王5年時は、新羅国内の不安定な社会情勢により、国内で薦挙をはじめとする政治改革がなされていたと言える。前述において、唐の意志が反映された新羅使であった点に関しては言及したが、この見解に従うならば、恵恭王5年はこのような社会状況の混乱を原因の一旦として新羅が国内において積極的政治政策を打ち出していた時期と合致する。また、日本側からの遣新羅使等の動きが見えないことと合わせて勘案すると、新羅が唐という存在を背景に日本に使節を派遣することを外交方針のひとつとし、新羅が混乱期に打開策の積極的な対外政策の一環として推し進めた派遣であったと考えられる。その時期が、恵恭王即位直後ではない、恵恭王5年という時期であったのではなかろうか。

3、日本側の対応とその姿勢

では日本側はこの新羅使に対しどのような姿勢で対応したのか。日本側は「土毛」という新羅の用いた表現に対し、批判的な態度を示している。その理由として「新羅は「土毛」ではなく「調」を献上すべきである」と述べ、今回の新羅使が「調」ではなく、「土毛」と改称した新羅側の意図を問うている。これに対して新羅側は、「今回は書簡を伝送する使いに添えて献上する産物なので「調」とは言わない⁵⁹⁾」と主張し、「土毛」であって「調」ではないという立場を伝えている⁶⁰⁾。また、この使節は752年以来久しぶりに賜物を受けた新羅使であり、日本の新羅に対する賜物受給という対応は、それ以前の「放還」された前3度の新羅使(760年、763年、764年)にはなく、同じ「放還」であっても以前の新羅使とは大きく異なる。加えて注目すべきは、日本はこの時の新羅使に対して、来朝した使節団だけではなく新羅国王にも絶を支給していることである。つまり、日本の外交措置の入京有無という観点からみると、「放還」となり、日本の対応はそれ以前と同じくするものであるが、実際には、それ以前の「放還」された新羅使とは様相を異にする対応であった。

結局日本は、天平宝字4年(760)に金貞巻へ伝えた使者の4条件が守られていないという理由を根拠として「放還」措置をとる。しかしながら、この新羅使は大宰府に安置され饗応を受けており⁶¹⁾、即日放還の措置がとられていない点は非常に重要である。基本的に日本側の対応として使者の4条件が守られていない場合には、饗を催し安置するという対応はとられず、放還措置をとる。しかしながら、この時は大宰府に安置されているため使節が太宰府にていくらかの時間滞在できたという点を考慮しなければならない。ここで考察すべき問題は、神護景雲2年(768)10月に大宰府で新羅交関用の綿が支給された記事がみえる点である⁶²⁾。この新羅使は、入京はしていないものの大宰府で饗を受けるためそこに留まっていたと考えられるため、日本側は、記事にみえる新羅交関用の綿を用いて大宰府で交関を行った可能性が示唆される。このような新羅日本間のやり取りに関しては、賓礼の中での交易施行の有無が問われる。具体的に、〈表1〉752年の新羅使は、『続日本紀』にみえる使節団の記事と「買新羅物解」に付された日付を合わせて考えると、新羅使入京中の日付内いわば賓礼のなかに組み込まれた形式でのやり取りであった点が確認できこの点は重要である。しかしながら、大宰府で交関が行われたとするのなら、賓礼の中に組み込まれ施行されたやり取りでは無くなり、大きく異なることとなる。このような点を考えるならば、日本側も新羅の贄す品物を欲していて、交関することに対して現実的な利点を求めている可能性があるという点は留意すべきである。

4、前後に発遣された使節と関連した対外政策の特質

加えて考察すべきは、この新羅使が新羅と日本間の関係だけでは把握することの難しい新羅使である点である。しかしながら一方で、新羅が唐の意志において派遣した使節であったと把握するにも注意が必要である。この新羅使派遣の直前には、日本の遣唐使・遣新羅使の動きを確認することはできない。したがって、少なくとも恵恭王5年／神護景雲3年(769)の新羅使は、日本側の主体的な動きにより新羅側が応対する形で実現した新羅使であるとは考えにくい。

では、このような唐の関与についてどのように考えるべきか。まず一点目にこの新羅使は、書簡伝送及び「唐国消息」の伝達を行った新羅使であったために、その結果として日本が態度を軟化させて大宰

府で饗した新羅使であったという見方である⁶³⁾。この時日本は、書簡伝送だけではなく同時に「唐国消息」を受けていることから、日本にとって新羅使を通じて唐の最新情報を受取るルートが日本にとって情報収集の重要な手段のひとつであったことを意味する。このような日唐外交を中継する新羅の国際的役割については、「大国」自認⁶⁴⁾や唐への「外臣の礼」に拠る⁶⁵⁾との指摘もなされている。しかしながらそれ以上に、安史の乱の終結を契機として、新羅使のこのような形態があらわれる点は注目すべきではなかろうか。新羅は安史の乱に対して、渤海とは異なり比較的中立的な立場で臨んだ⁶⁶⁾。新羅は、安史の乱勃発後すぐに唐へ使節を派遣してはいないものの、安史の乱のあいだも継続的に使節の派遣を行っており、玄宗が蜀にいることを知ると、成都に朝貢の使者を派遣している⁶⁷⁾。

また、史料からもみえるようにそれまで日本は、渤海ルートを通し唐の情報を受けており⁶⁸⁾、このような当該期の日渤海関係については⁶⁹⁾、天平宝字2年(758)の遣渤海使小野田守の派遣を重要視し論考が進められ、新羅征討のために日本が渤海との連携を強固なものにする目的があったと指摘されてきた⁷⁰⁾。これは、新羅討伐計画時期に渤海と日本の関係が急速に近づいたことによる新羅との緊迫した関係によるものと考えられるが、恵恭王5年／神護景雲3年(769)新羅使の段階では、新羅が日本へ唐の情報を伝達している。しかたがって、このように新羅を介して日本へ唐の情報伝達・書簡伝送が行われたというのは、日本にとっての情報伝達ルートが渤海ルートから新羅ルートへ変容したことを意味する。すでに、天平宝字6年(762)に来日した渤海使王新福らによって、安史の乱の影響により唐と渤海間の交通が容易ではないという知らせが入っているが、当該期に至ってもこの状況が継続しており日本が渤海経由での情報収集が容易でなかったことが窺われる。

最後に留意すべき点として、この新羅使は日本から遣使して情報収集をおこなっているのではなく、情報をもった新羅使の来日という受動的な情報収集であり、遣渤海使を派遣している時期とは異なる点である⁷¹⁾。すなわち、遣渤海使の派遣後に渤海使の来日というような日本側の使節の派遣に應對して来日した新羅使ではないという点である。これは、後述する恵恭王10年の新羅使と合わせて考察する必要が求められるが、恵恭王5年／神護景雲3年(769)の新羅使は、新羅側の積極的外交交渉の一面として捉える必要があると考える。

2) 恵恭王10／宝亀5年(774)の新羅使

1、新羅使の実態

それでは次に恵恭王10／宝亀5年(774)の新羅使について考えたい。恵恭王10／宝亀5年(774)の新羅大使金三玄は、礼府次官の第八位沙浪で他の新羅使よりも比較的高い官位にあった。また使節団も235人と前回と同等あるいはそれ以上の規模を有するものである⁷²⁾。この新羅使も前回と同じく大宰府で来日の目的を問われているが、新羅大使金三玄は「旧交を修復してお互いに聘問の外交を開きたいので国信物と遣唐大使藤原河清^(ママ)の書状を持参して来朝した」⁷³⁾と述べている。そしてこの金三玄の返答に対して日本は、「聘問の外交は、対等な「亢礼之隣」の隣国関係を示すものであり、貢調を国信とあらためることは、慣行をあらためるものである」と不満の意を表す返答をする⁷⁴⁾。また金三玄は「自身は朝貢使ではないが、新羅では今回の使いのついでに「土毛」を献上するので、これは「調」とはいわない」との返答をして新羅側の外交姿勢を伝えている⁷⁵⁾。

2、新羅の実態と国情

では、新羅の立場から考えた際この新羅使をどのように把握するべきか。今回の新羅使は、従来よりも官位が高く、礼府次官である金三玄が派遣されている。この点に関しては、新羅が日本を「亢礼之隣」の国として、これと「聘問」する対等な外交関係を行わんとする「新意」を鮮明にすることにおいて、礼府次官である金三玄を派遣した意図があるとの指摘がある⁷⁶⁾。もちろん今回の新羅使がそのような意識をもって、従来に比べ高官位で礼府の次官である金三玄が派遣されたという点は否定できない。だが、新羅側は何故そのような意識をもって日本に使節を送る必要があったのか。これに対し留意すべき点として、当該期新羅の国内情勢をどのように見るかという問題が挙げられる。新羅使が来日した恵恭王 10 年（774）は、9 月に金良相が上大等に就いた年である。この金良相の上大等就任に関しては、これを契機として金良相の反専制主義勢力という下代的性格が表出するひとつの時期と考え、これ以降を新しい政権があらわれだす局面のひとつと考える理解が示されている⁷⁷⁾。また、金良相だけではなく金邕も反王党的性格を有した人物であるとし⁷⁸⁾、景德王 19 年（760）に執事部の侍中に就任したことにより中代王権が否定されるが、反専制主義勢力（下代的性格）が登場する政権交代期であるとみる見解もあり⁷⁹⁾、政治的に注目すべき時期である。もちろんこの恵恭王 10 / 宝亀 5 年（774）の新羅使の記事が確認できるのは 3 月のことで、金良相の上大等への就任以前の記事ではある。しかしながら、新羅は恵恭王 9 年（773）から恵恭王 12 年（776）までのあいだ、毎年あるいは年に 2 度というそれまで以上の頻度で唐へ使節を送っており、それ以前と比べ活発な対唐政策を展開するようになる⁸⁰⁾。史料上にみえるこのような新羅の対唐政策の動向についてまとめたものが、以下の〈表 4〉である。

〈表 4〉新羅の対唐使者派遣記事（恵恭王 9 年～ 12 年）

年（西暦）	月	史料内容（史料名）
9 年（773）	夏 4 月	使者を派遣し、新年祝賀させ、金・銀・牛黄・魚牙紬・朝霞〔紬〕などの土産物を献上。（三 / 冊朝）
	6 月	使者を派遣し、恩寵に感謝する。代宗は使者を延英殿で引見した。（三 / 冊朝）
10 年（774）	夏 4 月	使者を派遣、朝貢。（三 / 冊朝 / 冊褒）
	冬 10 月	使者を派遣、新年祝賀をさせた。代宗は使者を延英殿で引見し、員外衛尉卿を授けて帰国を許す。（三 / 冊朝 / 冊褒）
11 年（775）	春正月	使者を派遣、朝貢。（三 / 冊朝）
	夏 6 月	使者を派遣、朝貢。（三 / 冊朝）
12 年（776）	秋 7 月	使者を派遣、土産物を献上。（三 / 冊朝）
	冬 10 月	使者を派遣、朝貢。（三 / 冊朝）

【凡例】『三国史記』巻 9、新羅本紀、恵恭王条：三 / 『冊府元龜』外臣部、朝貢：冊朝 / 『冊府元龜』外臣部、褒異：冊褒

〈表 4〉にみえるように、新羅は恵恭王 9 年を契機として頻繁な遣使をみせるものの恵恭王 12 年以降その活動は停滞して唐へ使節の派遣はみられなくなり、これ以後新羅の対外政策は消極的なものとなる。〈表 4〉にみえるあいだの積極的な対唐政策に関しては、金良相が上大等に任じられたことにより自己の

勢力基盤強固のための政策として行ったと見るべきか、あるいは恵恭王一派はそれまでも親唐的な政策を行っていたため、より活発な親唐政策による自己の勢力回復が目的で、すなわち唐を政治的に利用する意図で派遣したという可能性が考えられる。史料には活発な使節派遣の意図は記されていないため、その内情を把握・論証しえない。しかしながら中代を通して漢化政策を積極的に推進したのは、下代的性格を有した勢力ではなく、中代的性格を有した勢力であった点についてはふれておきたい。いずれにしろ、新羅の対唐政策が恵恭王9年(773)以降、それ以前とは異なる変化を見せたことは確かであり、新羅が対外政策において活発な動きを見せはじめた年である。このように、金良相が上大等に就く恵恭王10年(774)段階には、恵恭王を中心とする王党派と下代的性格を有する集団とのあいだで軋轢が生じており、拮抗関係に変化があらわれた。そのような状況のなか対外政策にも変化がみえる時期と把握することが可能ではなかろうか。

3、日本側の対応とその姿勢および対外政策の特質

一方これに対して日本側は、渡海料を支給する形ですぐに「放還」の措置をとったため、この使節は帰国を余儀なくされている⁸¹⁾。今回も新羅使は藤原清河の書簡を持参し来朝しているが⁸²⁾、前回に比べ日本側の対応には差がみられる。前回のように大宰府に安置され、饗を受けたとの史料はみられない。もちろん、放還された新羅使に対して渡海料を支給し帰国させることは通例的な措置ではないため、これは新羅使の書簡持参への特別応対的な意味が含まれていたと考えられる⁸³⁾。

また、この新羅使も派遣直前に日本の遣唐使及び遣新羅使の動きは見えないため、日本側の主体的な流れの中で派遣された新羅使であったとは考えにくく、新羅側の意図を考えなければならないのである。

3) 恵恭王15年／宝亀10年(779)の新羅使

最後に、恵恭王15年／宝亀10年(779)の新羅使についてみていきたい。一般的にこの使節をもって公式的な新羅使節の派遣は終焉を迎えたとされるが⁸⁴⁾、特筆すべきは、最後の新羅使というだけではなく、この新羅使は752年以降久しぶりに「入京」を許されたという点である。では具体的にそれ以前の使節とはどのような点が異なるのか、「入京」措置をとった日本側だけではなく、派遣主体の新羅側にも「入京」を許可されるような以前とは異なる要素がみられるのか。その実態を詳細に検討するためにも、恵恭王15年／宝亀10年(779)の新羅使に関して一連の史料を以下に挙げ、詳細に検討を進めていくこととする。本文史料には便宜上①から⑩までの番号を付し掲げた。

- ① 『続日本紀』巻35 宝亀9年(778)11月壬子《10日》壬子、遣唐の第四船來りて薩摩國甌嶋郡に泊てたり。その判官海上真人三狩らは耽羅嶋に漂着して、嶋人に略し留めらる。但し、録事韓國連源ら陰に謀りて纜を解きて去る。⁸⁵⁾
- ② 『続日本紀』巻35 宝亀10年(779)2月甲申《13日》甲申、大宰少監正六位上下道朝臣長人を遣新羅使とす。迎遣唐判官海上三狩ら迎へるが爲なり。⁸⁶⁾
- ③ 『続日本紀』巻35 宝亀10年(779)7月丁丑《10日》丁丑、大宰府言さく、「遣新羅使下道朝臣長人ら、遣唐判官海上真人三狩らを率て來歸れり」とまうす。⁸⁷⁾

- ④ 『続日本紀』 卷 35 宝亀 10 年（779）10 月乙巳《丁酉朔 9 日》冬十月乙巳、大宰府に勅したまはく、「新羅使金蘭蓀ら、遠く滄波を涉り、正を賀し調を貢る。それ諸蕃の入朝すること、國に恒例有り。通状有りとも雖も、更に反復すべし。府承知して來朝くる由を研め問ひ、并せて表函を貢ふべし。（下略）⁸⁸⁾
- ⑤ 『続日本紀』 卷 35 宝亀 10 年（779）11 月己巳《3 日》己巳、勅旨少輔正五位下内藏忌寸全成を大宰府に遣して、新羅國使薩浪金蘭蓀が入朝する由を問はしむ。⁸⁹⁾
- ⑥ 『続日本紀』 卷 36 宝亀 11 年（780）正月己巳《2 日》己巳、天皇、大極殿に御しまして朝を受けたまふ。唐使判官高鶴林、新羅使薩浪金蘭蓀ら、各儀に依りて拜賀す。⁹⁰⁾
- ⑦ 『続日本紀』 卷 36 宝亀 11 年（780）正月辛未《5 日》辛未、新羅使方物を獻る。仍て奏して曰さく、「新羅國王言さく、「夫れ新羅は、國を開きて以降、仰きて聖朝の世世の天皇の恩化を頼り、舟楫乾くときなく、御調を貢奉ること年紀久し。然るに近代より以來、境内に奸しき寇ありて、入朝すること獲ず。是を以て謹みて薩浪金蘭蓀、級浪金巖らを遣して、御調を貢り、兼ねて元正を賀かしむ。また遣唐判官海上三狩らを訪ね得て、使に隨ひて進ましむ。また常の例に依りて學語生を進る」とまうす」とまうす。參議左大弁正四位下大伴宿祢伯麻呂勅を宣りて曰はく、「新羅國は、世舟楫を連ねて國家に供奉れること、その來れること久し。而れども泰廉ら國に還りて後、常の貢を修めずして毎事に无禮し。所以に頃年彼の使を返却けて接遇を加へざりき。但し今朕が時に、使を遣して貢を修め兼ねて元正を賀かしむ。また海上三狩らを搜り求めて、使に隨へて送り來れり。（中略）是の日唐と新羅との使を朝堂に宴す。祿賜ふこと差有り。⁹¹⁾
- ⑧ 『続日本紀』 卷 36 宝亀 11 年（780）正月壬申《6 日》壬申、新羅使薩浪金蘭蓀に正五品上を授く。副使級浪金巖に正五品下。大判官韓奈麻薩仲業、少判官奈麻金貞樂、大通事韓奈麻金蘇忠の三人に、各從五品下。自外は六品已下各差有り。並に當色并せて履を賜ふ。⁹²⁾
- ⑨ 『続日本紀』 卷 36 宝亀 11 年（780）正月癸酉《7 日》癸酉、五位已上と唐・新羅の使とを朝堂に宴す。祿賜ふこと差有り。⁹³⁾
- ⑩ 『続日本紀』 卷 36 宝亀 11 年（780）正月壬午《16 日》壬午、唐と新羅との使に射と踏歌とを賜ふ。⁹⁴⁾
- ⑪ 『続日本紀』 卷 36 宝亀 11 年（780）2 月庚戌《15 日》新羅使蕃に還る。璽書を賜ひて曰はく、「天皇敬ひて新羅國王に問ふ。朕寡薄を以て業を纂ぎ基を承く。蒼生を理め育ひて、中外を寧し隔てつ。王遠祖より恒に海服を守りて、表を上り調を貢ること、その來れること尚し。（中略）今此蘭蓀猶口奏を陳べたり。理例に依りて境より放ち還すべけむ。但し三狩らを送りて來れり。事既に輕からず。故に賓礼を修めて以て來意に荅ふ。王これを察すべし。後使は必ず表函を贐し礼を以て進退せしむべし。（中略）今還使に因りて荅の信物を附く。（下略）⁹⁵⁾

1、新羅使の実態

それでは、新羅使の実態について具体的にみていきたい。今回の新羅使は、前回恵恭王 10 年／宝亀 5 年（774）の新羅大使金三玄と同様の八位である薩浪金蘭蓀が大使となり、以下副使、大判官、少判官、

大通事らの構成であった。しかしながら、使節を構成する全体の人数に関しては把握することができない。また今回の新羅使の目的には、抑留されていた遣唐判官の海上真人三狩を護送するという役目があったことが知られる（史料①②③）。この事件は、宝亀8年（777）6月に日本から唐へ派遣された遣唐使の帰国船が宝亀9年（778）年11月に薩摩国甑嶋郡へ到着したことからはじまる。778年に遣唐副使の小野石根らが唐送使の趙宝英らと一緒に4船に分乗し帰国を試みるが、耽羅に漂着してしまい、遣唐判官の海上真人三狩らは未だ抑留されたままであるとの報告が、同乗しながらも耽羅より脱出し、日本に帰国した録事韓国連源より報告された（史料①）。その報告を受けて日本は、当時耽羅を従属下にしていた新羅に対して宝亀10年（779）2月に太宰少監下道朝臣長人を遣新羅使として任命し、派遣することとする（史料②）。日本の遣新羅使の派遣は、752年まで遡るため⁹⁶⁾、今回が約25年ぶりの派遣となった。また通常、遣新羅使は中央から派遣されるが、今回は大宰府からの直接派遣である。これは、抑留という緊急事態に対して早急なる対処を行ったためであると考えられる。そして、このとき唐使の孫興進らは大宰府に滞在しており、唐使判官高鶴林の耽羅抑留の知らせも耳に入ったと考えられ、このような緊急対応は唐使に対する配慮もあったとされる⁹⁷⁾。この時は、唐使判官の高鶴林以外に5人の唐人がいた。そして遣唐使を日本に送るべく帰国の4船に分かれて乗船したなか、遣唐判官の海上真人三狩らの第3船に乗っていたと考えられる⁹⁸⁾。史料③によれば、同年7月には遣唐判官海上真人三狩を率いて、太宰少監下道朝臣長人が帰国の途についたとある。史料③の記事には、新羅使と唐使についての記載はなされていない。したがって、これが史料⑦の内容と合致するものとして解釈できるのかという疑問は残される⁹⁹⁾。そのため、史料③の7月の段階において既に大宰府に到着していたのではないかという見解も示されているが¹⁰⁰⁾、この点に関しては史料よりこれ以上読みとることはできない。

2. 新羅の実態と国情

ここで同時に注目すべきは、新羅の外交政策の変化である。新羅は恵恭王12年までは唐に頻繁に使節を派遣していたのにも関わらず、それ以降は一度も派遣していない。新羅―唐間の使節派遣は新羅の主体的目的のもと派遣されていたと考えられるが、恵恭王13年以降新羅の対外政策は消極的なものへと転換している点は見逃せない。これは、漢化政策を推進せず親唐派ではない下代的性格を有した金良相がこのような性格をもって台頭したために、漢化政策を推進する勢力とは政策を異にするという立場で行った対外政策であるために唐には使節を派遣せず日本には派遣したとの見方もある。しかしながら果たしてこの時新羅にとって積極的な意思・目的のもと日本へ使節を派遣する理由があったのか考慮すべきである。

新羅使に関してはその性格分類から、①朝貢使の性格を帯びた「進調」「貢調」等の調の貢納や「国政を奏請す」「政を請す」という請政、言語習得・学語生の進上を目的として派遣された新羅使、②送使的性格を帯びた役割をもった新羅使が存在し、派遣される使者の官位は②に比べ①の場合が比較的高官位となるとの指摘がなされている¹⁰¹⁾。8世紀には、入唐から約1年後、または帰国できない遣唐使に、それぞれ遣唐使復路の保護、遭難の消息伺いを目的として遣新羅使が派遣されている¹⁰²⁾。このように、新羅が日本の遣唐使の保護の要請をうけた遣新羅使の派遣により、その結果として送使の性格を帯びた新羅使が派遣されることは対日関係の中で決して例外的な事例ではない。また、今回は後者の遣唐使の遣

難伺いを発端に派遣された新羅使であるが、中代末期は新羅の交易的性格の成長と拡大が見て取れる時期といえども、新羅商人航路を頼り遭難者が帰国できる時期とは言い難い。したがって、積極的な対外政策を展開していなかった新羅が日本に新羅使を派遣したことは、対唐政策の代替えとして使節を日本に派遣したと考えるより、送使の役割の性格を強くもった新羅使を派遣したのであって、恵恭王代の前2度の新羅使とは異なる目的の使節であったと考えるべきである。

もうひとつ考えなければならないのは、恵恭王 15 年／宝亀 10 年（779）当時新羅側が積極的に入京を望む理由があったのかという点である。前述において、恵恭王 5 年に大宰府で交関が行われた可能性を指摘した。また恵恭王 15 年（779）という年は、金良相の上大等の就任の 5 年後で、翌年の 16 年（780）4 月には金良相・敬信の挙兵がなされ（〈表 1 参照〉）、中代王室が終焉を迎える時期である。特に史料⑪は、金良相・敬信の挙兵 2 か月前で同年 2 月には金志貞の乱がおこる。したがって、前回の新羅使派遣の時期と比べて中代的性格集団と下代的集団のあいだで激しい軋轢はみられない時期であったと考えられる。これは、景德王代に推し進めた漢化政策のひとつであった唐式の官制改革を恵恭王 12 年に旧式へ復古している点からも言えるであろう。このような一連の動きに呼応して新羅使の性格にも影響があったと考えなければならない。すなわち、前回の新羅使が派遣された恵恭王 10 年と今回の新羅使が派遣された恵恭王 15（779）で比較すると、その状況は、国内政治動向のみに留まらず対外政策でも大きく異なっている。また〈表 2〉の内容からも分かるように、外交儀礼を遵守した外交形式を求めていたのは新羅側ではなく日本側であった点も考慮しなければならない。基本的に律令体制下での迎接は、新羅使がいかなる目的でやってきたとしても、朝貢形式を遵守した使節形態であるかという点に依拠し処遇するという性質であったためである。

3、日本側の対応とその姿勢

日本側の対応についてみていく。日本は大宰府に來日した新羅使に対して、入朝理由と表函の有無、加えて表文の内容を知らせるように求めた（史料④）。一方再び、11 月には中央から大宰府に内蔵忌寸全成を派遣して、再度新羅使に対して入朝理由を問うていることが史料⑤より確認できる。今回はこのように 2 度も入朝の理由を尋ねているが、これは一度目の際に大宰府から表文を持参していないとの報告があがったと考えられ、それに対して日本側が今回の新羅使の対処に関して慎重になっていたことが見て取れる。もちろん新羅は一貫し表文を持参することはない。しかし 752 年には、表文持参がなかったが入京を認められたという場合もあることから、遭難した日本の遣唐使護送の新羅使に対して日本側の入京可否の判断が求められる状況にあったと考えられる。結果として日本は、この新羅使のみではなく、唐使判官の高鶴林ら 5 人に対しても入京を認める勅を下した（史料⑥）。

そして史料⑥より⑪までが元日朝賀に関する一連の史料であるが、最終的にこの新羅使は、表文がないのにも関わらず賓礼が適用され、宝亀 11 年（780）の元日朝賀に唐使とともに参列することとなる。それだけではなく、史料⑧⑨より確認できる通り、叙位・丹色衣服の賜与がなされ、禄も出されている。

以上のように今回の使節に関しては、新羅側の意図によって派遣がなされた新羅使というよりも、抑留された唐使の護送という点に日本側の大きな目的があった。そのためまず新羅への遣新羅使派遣という日本側の動きがみえ、それに応対する結果として新羅より日本へ派遣された新羅使であったと考える

ことができる。すなわち今回の新羅使に関する一連の事柄について整理すると、宝亀6年(775)に遣唐使任命→宝亀8年(777)4月辞見→同年10月判官小野滋野が唐使とともに帰国→11月判事韓国源は帰国するが、遣唐判官の海上真人三狩は耽羅に抑留されていることが判明→遣新羅使として太宰少監下道朝臣長人が任命・派遣→宝亀10年(779)10月新羅から新羅使が来朝するに至っている。遣唐使派遣の前後に遣新羅使が派遣されるという事例は、8世紀に至り確認できるが¹⁰³⁾、今回はこのように新羅使が日本の遣新羅使の派遣をうけて派遣されたと考えることができる。そのため、新羅使の派遣主体である新羅側に積極的な派遣の目的があったかという点については慎重に検討する必要がある。いわば、新羅の立場より考察した際、前回、前々回の新羅使と同様の意図で派遣された使節とは言えないということである。むしろ、今回の派遣に関しては、日本の遣新羅使の要請に従い護送の送使として新羅使が派遣された可能性が高い。

そしてこの使節は、日本側と新羅側に残る史料では評価・内容が異なる。『続日本紀』では、今回の新羅使を賀正貢調の使節であると判断して、海上真人三狩の護送をしたという点を評価する形式で記されているが、外交形式については不満を表し、強硬な態度を示している(史料⑩)。対して、新羅側の史料である『三国史記』では『続日本紀』とは異なり、金巖の知識等を評価して日本側が残留を望んだという記事が見られる¹⁰⁴⁾。これは、新羅の使者が備えた文化知識を評価したものであるとの理解が示されており¹⁰⁵⁾、このように両者の内容には差異が見られ、『続日本紀』で賀正貢調の使節であると判断した理由が問われる。このように考えるならば、送使的性格を有し派遣されてきた恵恭王15年(779)の新羅使に対し、日本側が元日朝賀の賀正貢使としての認識で律令体制下の賓礼に組み込み対応を行ったとみるべきではないか。

4、前後に発遣された使節と関連した対外政策の特質

景德王23年(764)以降の新羅使は、恵恭王15年(779)を含め留唐学僧の消息・書簡伝達・漂着した遣唐使の護送など唐を背景とした性格をもつ新羅使に転換する。すなわち、新羅単独の目的のみで派遣される新羅使がみえなくなる。これは、それ以前の新羅使の性質と比べ大きく異なる点であり、安史の乱終結後の新羅使からこのような性格をみせる。理由としては、安史の乱終結により東アジア情勢が新たな転換期を迎えたことが考えられる。直前の景德王23年/天平宝字8年(764)の新羅使の場合は、一定の年期を経る定例的使節の派遣であった。しかし、764年の新羅使はわずか1年の間隔で来日した異例の使節であった。この時、帰国の消息を問われた入唐僧戒融は渤海ルートにのって帰国したと考えられるが、その安否を唐が羅日ルートを通して問うてきたのである¹⁰⁶⁾。いわばこの新羅使からは、それまでとは異なる唐・新羅・渤海・日本をふくむ情報の伝達・交換としての使節としての意味を成し、日本の求める外交形式での交渉や従来多くの指摘がなされている新羅の交易面を重視する使節とは一線を画す目的があった。すなわちこの新羅使を契機として前段階とは異なる交渉の局面が生じはじめたと考えられる。

IV. おわりに

以上のように本稿では恵恭王代に派遣された3度の新羅使に注目し、その性格について再考を試みた。管見の限り、恵恭王代3回の対日外交はそれぞれ異なる背景と目的において派遣された使節であったと考えるべきである。特に、恵恭王5年／神護景雲3年(769)と恵恭王10年／宝亀5年(774)の新羅使は新羅国内の政治状況が影響し、この時期に派遣されたと考えられる。一方、恵恭王15年(779)の最後の新羅使は日本の要請に従い派遣されたと考えられ、直接的な新羅国内の政治社会状況の結果派遣された使節とは考えにくい。また8世紀末新羅の新羅使は、単純な入京／放還という二項対立的な把握では捉えることはできず、新羅、日本、唐との関係を複合的に理解し規定することが求められる。ではこのような視座により、具体的にいかなる知見が得られるのか、本稿の論点を以下にまとめる。

第一に、日本は唐礼に拠る、律令体制にのっとりた賓礼を求めていた。しかしながら恵恭王代を通し新羅側がこの賓礼のなかでの交渉に主体的目的を持ち、対日交渉を推し進めようとしたのかという点は争点となる。新羅の立場からみた際、唐・日本への新羅使派遣の目的は同様には考えられない。新羅にとっては唐との公的な外交交渉の場こそ必要不可欠であった。しかしながら恵恭王代に日本で入京せずとも交易可能で経済的恩恵を受けられる状況があったとするのならば、日本側の求める賓礼のありかたに政治的理由を求めたとは考えにくい。

第二に、第一の結論を受けて考察するならば、恵恭王5年／神護景雲3年(769)と恵恭王10年／宝亀5年(774)の新羅使は対日交渉に何を求め派遣されたと考えるべきか。前者の時期新羅は、大恭の乱の混乱後にあたり国内で積極的政治政策を打ち出していた。またこの時日本側からの遣新羅使等の動きは見えない。したがって新羅が唐を背景としつつも、混乱期打開策の一環として推し進めた対外政策のひとつであったとみることができる。また後者の恵恭王10年前後は、新羅の対唐政策が活発な動きを見せだす時期である。また恵恭王10年(774)は、恵恭王を中心とする王党派と下代的性格を有する集団とのあいだで政治的軋轢が生じており、金良相が上大等に就くことで拮抗関係に変化があらわれたと考えられる年である。そのような状況のなか、新羅の対外政策にも変化がみえだす時期であったと把握することができる。また、この新羅使も派遣直前に日本の動きは見えないため、日本側の主体的な流れの中で派遣された新羅使であったとは考えにくい。

第三に、恵恭王15年(779)の新羅使は、新羅が主体的な意図・目的において派遣した新羅使というより、日本の要請に従い派遣した送使的性格を有し派遣されてきた新羅使の可能性が高い。すなわち、恵恭王代の前2回の新羅使と比べ、新羅側の派遣の主体性は異なるものであったと考えるべきである。つまり、新羅の意思で積極的に派遣されたとは考えにくい。新羅の対外政策は、恵恭王13年以降消極的なものへと転換しており、15年の新羅使は遣唐使の遭難伺いを発端に派遣されたものである。中代末期は、新羅の交易的性格の成長と拡大が見て取れる時期といえども、新羅商人航路を頼り遭難者が帰国できる時期ではない。したがって、対唐政策も含む積極的な対外政策を展開していなかった新羅が日本に新羅使を派遣したことは、対唐政策の代替えとして使節を日本に派遣したと考えるより、送使の役割の性格を強く持った新羅使を派遣したと考えるべきである。これに対し、日本側が元日朝賀の賀正貢使としての認識で律令体制下の賓礼に組み込む対応を行ったものと考えられるべきであろう。

注

- 1) 本論文は、2019年8月5日於立命館大学衣笠キャンパス第12回日韓次世代研究者フォーラムでの口頭発表を加筆修正したものである。本研究は、ソウル大学校歴史研究所丹陽韓国古代史研究基金の2019年度研究費支援を受けて作成した研究成果の一部である。
- 2) 恵恭王代の政治史について代表的研究は、以下を参照されたい。井上秀雄 1974『新羅史基礎研究』東出版；李基白 1974『新羅政治社會史研究』一潮閣；李基東 1980『新羅骨品社会와 花郎徒』韓国研究院；金壽泰 1996『新羅中代政治史研究』一潮閣；申澄植 2004『統一新羅史研究』韓国學術情報；신정훈 2010『8세기 신라의 정치와 왕권』韓国學術情報；이영호 2014『신라중대의 정치와 권력구조』지식산업사；曹凡煥 2014「신라 中代末 惠恭王의 婚姻을 통하여 본 政局의 변화」『新羅文化』43、東國大学校新羅文化研究所；선석열 2015『신라 왕위계승 원리 연구』해안。
- 3) 「上古の復歸」とは、恵恭王12年の官号復古にとどまらない政治体制全般にわたる復古、すなわち貴族（眞骨）連合の復古に対する希望を意味する。しかしながらここでいう下代の貴族連合的傾向と上代のそれは同質なものではないと理解される。具体的に上代の場合は、氏族社会からの遺制である族長的勢力の成長を土台にしていると考えられる。それに対して下代の場合は、いったんは王権中心に統制された貴族たちが再び分裂したという現実に規制されて生じた現象であると規定している（李基白 1974「新羅恵德王代の 政治的変革」『新羅政治社會史研究』一潮閣）。しかしながら、後述註にて示すように、中代の「専制政治」という概念に対しては疑問も示されているため、一度は王権中心に統制された貴族たちが再び分裂したという点についてどのように理解するかに関しては議論の余地が残されている点を示しておきたい。また、上代の王位継承と貴族連合構造の研究については、李晶淑 1994「眞平王의 即位을 전후한 政局動向」『釜山史學』27；朴成熙 2001「新羅 眞平王 즉위 前後 정치세력의 동향」『韓國古代史研究』22；선석열 2015『신라 왕위계승 원리 연구』해안などに詳しい。
- 4) 李基白 1974、前掲書。
- 5) 新羅中代の李基白が提示した専制王権という概念に関しては、それと関連する「専制政治」という概念をも含め、これを中代政治史のなかでどのように理解するのかという再論が行われている。具体的には、1990年代以後「専制王権論争」が展開され、統一以後の新羅政治形態については、通説のように説明されている「専制政治」という概念を用いて新羅中代政治史の特筆を理解できるのかというより根本的な問題へまで拡大し議論が推し進められた（李仁哲 1993『新羅政治制度史研究』일지사；李基白 1993b「統一新羅의 専制政治」『韓國史上의 政治形態』一潮閣；이영호 1995「신라 정치경제사 연구」慶北大学校博士学位論文；李基白 1995「新羅 専制政治의 崩壞過程」『學術院論文集人文社会科学』24；李仁哲 2003『신라 정치경제사 연구』일지사；하일식 2006「신라 '전제정치'의 개념에 관하여」『신라 집권 관료제 연구』연세국학총서 63、해안；이영호 2014、前掲書）。
- 6) 全德在 1997「新羅 中代 對日外交의 推移와 眞骨貴族의 動向 - 聖德王~恵恭王를 중심으로 -」『韓國史論』37、서울大学校国史学科。
- 7) 新羅中代は、太子冊封制が確立して、それにより王位継承に対して眞骨貴族の関与が制度的に除外された時代であると理解される。したがって、前後期と比べ王権が強化された時期であるとの考えが一般的である。そのため、初期の研究においてこのような中代王権の特徴を李基白は「専制王権」と呼び、新羅中代の政治的性格について規定を試みた（李基白 1974、前掲書；李基白 1993a「新羅 専制政治의 成立」『韓國史 轉換期の 문제들』知識産業社）。また以後の研究において新羅中代政治史の展開過程から、専制王権を支持する王党派と、それに反する勢力の間において二項勢力の対立関係が存在するとし、その関係変化過程に焦点をあてた研究もみられる（金壽泰 1996、前掲書）。また新羅中代は、漢化政策（唐式政策）を推進し王権の強化に努めた時期でもあったことも特徴のひとつとして考え、一連の漢化政策（唐式政策）と権力強化から政治構造に注目した研究も示されている（한준수 2012『신라 중대 율령정치사 연구』서경문화사）。本稿では、新羅中代に特徴的に行われた以上のような政策を指し示して中代的性格という表現を用いたい。
- 8) ここでいう下代的性格集団は、中代末期にいわゆる専制王権政策を否定した集団を指している。一般的に新羅下代は、宣德王代を過渡期とみて、宣德王を下代の実質的な始祖とみなしたうえで、元聖王を継承者とし、その即位こそが下代を実質的に開いた画期であったと評価する。すなわちこのような下代政権の特徴は、反武烈系かつ反恵恭王権と評価されるものである（金昌謙 1995「新羅 元聖王의 即位와 金周元系의 動向」『阜村 申延澈教授停年退任 史學論集』일월서각, 453頁）。新羅下代政治史に関しては、(권영오 2011『新羅下代政治史研究』해안；이문기 2015『신라하대 정치와 사회 연구』학연문화사)を参照されたい。
- 9) 河内春人 2000「新羅使迎接の歴史的展開」『ヒストリア』170、大阪歴史学会、5-14頁。
- 10) 酒寄雅志 1984「日羅交渉終焉をめぐる事情」『朝鮮史研究会会報』74、朝鮮史研究会；濱田耕策 2012『新羅

国史の研究 一東アジア史の視点から一 吉川弘文館。

- 11) 『三国遺事』巻2、紀異、恵恭王条では「恵恭王二年丁未」をとっている。
- 12) 『三国遺事』巻2、紀異、恵恭王条
- 13) 李基白 1974、前掲書。
- 14) 朴海鉉 2003『新羅中代政治史研究』国学資料院、160~161 頁。
- 15) 『三国遺事』巻3、皇龍寺鐘・芳皇寺藥師、奉徳寺鐘では、「大曆庚戌十二月」とする。
- 16) 『三国史記』巻9、新羅本紀、恵恭王 5 年 (769) 3 月条；同年 5 月条；恵恭王 6 年 (770) 正月条
- 17) 満月夫人の政治的性格に関する研究としては、金壽泰 2011「신라 혜공왕대 만월부인의 섭정」『新羅史學報』22；이현주 2017a「신라 중대 王母의 칭호와 위상 - 혜공왕대 만월태후를 중심으로 -」『韓國古代史研究』85 を参照。
- 18) 『三国史記』巻9、新羅本紀、恵恭王元年 夏 6 月条「恵恭王立。諱乾運、景德王之嫡子。母金氏満月夫人、舒弗郡義忠之女。王即位時年八歳、太后攝政。」
- 19) 「聖徳大王鐘銘」の解釈については、韓國古代社会研究所編、南東信 1992「聖徳大王鐘銘」『역주 한국고대금석문 III』가락국사적개발연구소；濱田耕策 2012「聖徳大王神鐘と中代の王室」前掲書；濱田耕策 2013『朝鮮古代史料研究』「日本現代語訳『新羅聖徳大王神鐘之銘』」吉川弘文館；이현주 2017b「신라 중대 만월태후의 자기인식과 '성덕대왕신중」『여성과역사』27 を参照した。
- 20) 『三国遺事』巻2、紀異、恵恭王条
- 21) 金邕に関して史料上より確認できる経歴は、以下の通りである。『三国史記』巻9、新羅本紀、景德王 19 年 (760) 夏 4 月条「夏四月、侍中廉相退、伊滄金邕為侍中」；『三国史記』巻9、新羅本紀、景德王 22 年 (763) 秋 8 月条「上大等信忠・侍中金邕免。」このように金邕は、侍中の任を景德王 22 年 (763) 8 月に退いた後、史料上にてしばらくその姿を見せない。しかしながら鑄造年代を合わせて考えるならば、この時期こそ金邕が 7 つの官を兼任して上相となった時期であったと考えられる。
- 22) 「聖徳大王鐘銘」「檢校使兵府令 兼 殿中令 司馭府令 修城府令 監四天王寺府令 并 檢校眞智大王寺使 上相大角王臣 金邕」
- 23) 『続日本紀』巻32、宝龜 5 年 (774) 3 月条「對曰。本國上宰金順貞之時。舟楫相尋。常脩職貢。今其孫邕。繼位執政。」
- 24) 鈴木靖民 1967「金順貞・金邕論 一新羅政治史の一考察」『朝鮮學報』45、190 頁。その後も鈴木氏の見解を継承する形で金順貞と金邕は祖孫関係にあると理解する研究が示されている（朴海鉉 2003、前掲書、124 頁；이영호 2014、前掲書、93 頁）。しかしながら鈴木氏は論考内にて金邕を景德王の系譜に連なる人物として把握し、金邕は恵恭王の母方のおじとの把握していない（〈図 1〉〈図 2、左〉参照）。
- 25) 최홍조 2004「신라 애장왕대의 정치변동과 김연승」『韓國古代史研究』34、335~337 頁。
- 26) 景德王と金順貞の女（三毛夫人も含む）との間に王子は生まれなかったので、金邕を二人の間の男子と考えるのは誤りで、金邕は恵恭王の「元舅」ではないとの指摘がなされた（濱田耕策 2012、前掲書、脚注 17、196 頁）。史料上からも、三毛夫人も含むその他金順貞の女と景德王との間に王子が生まれたとの記録はない。
- 27) 金壽泰 1996、前掲書、111~112 頁。金壽泰は、金順貞と金邕が血縁関係のある孫子関係であるとするならば、金邕を満月夫人または恵恭王と姻戚関係があると考えなければならなくなり混乱をきたすこととなる。しかしながら、「孫」を単純に子孫の意味で把握してみると混乱はしないので、子とするのが妥当であるとしている。三毛夫人と金邕が活動した時期が同じなので孫子の関係とみるのは難しい。加えて、金邕を恵恭王または満月夫人の父である金義忠と関連させて把握するのも行き過ぎた飛躍であると言及する（金壽泰 1996、前掲書、112 頁、註 37）。
- 28) 李昊榮 1975「聖王大王神鐘銘의 解釋에 관한 몇가지 문제」『考古美術』125、13 頁
- 29) 박남수 2012「신라 성덕왕대 상제 김순정과 대일교섭」『新羅史學報』25。
- 30) 中代の新羅国内勢力状況、いわば王党派に属する人物なのか、または反専制主義勢力に属する人物なのかという問題に関しては多くの先行研究がある。この構図は研究者により異なり、政治的性格に伴う対外交渉のありかたについてもその評価は分かれている。これは金邕に限った問題ではなく、景德王代の金思仁についての理解も同様である。金思仁に関しては、『三国史記』景德王 15 年 (756) 春二月条の記事を根拠としてその理解には差がみられる。具体的には、①景德王 16 年 (757) の祿邑復活記事を根拠に祿邑復活反対とみて王党派と考える見解（朴海鉉 2003、前掲書を参照）、②景德王の外戚ではないため景德王 13 年 (754) の三毛夫人の再登場を批判するいわば外戚中心の政治を批判する見解（全徳在 1992「新羅 祿邑制의 性格과 그 變動에 관한 연구」『역사연구』1）などがみられる。しかしながら、金思仁に関しては、史料上より政治的立場としてどちらの立場をとった人物であるのかその判断が難しいと考える。そのため、この記事の根拠にどちらの派閥に属したのかについては判断できない。このように、金邕の場合においても、文献史料よりその対外方針について判断することは慎重にならざるを得ない。

- 31) 金順貞と金邕が景德王の王妃の家門で、彼らを外戚とみる代表的な見解としては(朴海鉉 2003『新羅中代政治史研究』国学資料院、122~123頁; 이영호 2014、前掲書、80~81頁)が挙げられる。
- 32) 新羅の王室は一般的に族内婚を実施したために、新羅中代も外戚を政局の運用のための重要な要素であると設定したうえで考察することについては注意が必要であるとの見解も示されている。そのうえで史料上の制約よりその関係を断定することは保留せざるを得ないとの意見もある(전덕재 2007『신라중대』『한국고대사연구의 새동향』서경문화사、142頁)。
- 33) 「聖徳大王鐘銘」「副使 執事部侍郎 阿浪 金体言」と見え、また景德王 22 年/天平宝字 7 年(763)に新羅使の大使として日本に来朝した人物でもある(〈表 2〉参照)。
- 34) 『三国史記』卷 9、新羅本紀、景德王 23 年(764)春正月条「二十三年、春正月、伊浪萬宗爲上大等、阿浪良相爲侍中。」
- 35) 『三国史記』卷 9、新羅本紀、惠恭王 10 年(774)秋 9 月条「秋九月、拜伊浪良相爲上大等。」
- 36) 「聖徳大王鐘銘」「檢校使 肅政台令 兼 修城府令 檢校感恩寺使 角干 臣 金良相」
- 37) 濱田耕策 2012、前掲書、192 頁。
- 38) 『三国史記』卷 9、新羅本紀、惠恭王 3 年(767)秋 7 月条「秋七月、遣伊浪金隱居、入唐貢方物、仍請加冊命。」; 『冊府元龜』卷 972、外臣部 17、唐代宗、大曆 2 年(767)「是年、新羅王金乾運遣其臣金隱居、奉表入朝、貢方物。」; 『旧唐書』卷 199、東夷列伝、新羅、大曆 2 年(767)条
- 39) 『三国史記』卷 9、新羅本紀、惠恭王 4 年(768)条「唐代宗遣倉部郎中歸崇敬、兼御史中丞、持節費冊書、冊王爲開府儀同三司・新羅王兼冊王母金氏爲大妃。」
- 40) 浜田久美子、2014「遣新羅使再考」『續日本紀研究』408、4 頁。
- 41) 濱田耕策 2012、「対日本外交の終焉」前掲書、385 頁。
- 42) 『続日本紀』卷 30、神護景雲 3 年(769)11 月丙子(12 日)条「丙子。新羅使級浪金初正等一百八十七人。及導送者卅九人。到着對馬嶋。」
- 43) 濱田耕策 2012、前掲書、378 頁。
- 44) 田村圓澄 1990『大宰府探究』、吉川弘文館。
- 45) 新羅が公的・私的貿易の利益を積極化させるために自分たちの許可を受けた商人たちを使節に含んでいたとする見解もある(김선숙 2007「新羅 惠恭王代(765~780)의 国内情勢와 対日外交」『精神文化研究』30-4、17~18頁)。この時の使節団は 200 余人ほどで、その規模は決して小さくはない。しかしながら新羅の使節は 752 年以後拡大し、人数の規模を根拠に商人であったと断定するには慎重にならざるを得ない。もちろん新羅の立場から見た際、交易という意図・目的があったと考えられるが、史料上からそのような内容を確認することはできず、もしその集団が商人であったとしても、王党派、反専制主義勢力など、どちらの勢力が主体となり許可した商人であったのかは判断が難しい。
- 46) 『続日本紀』卷 30、神護景雲 3 年(769)12 月癸丑(19 日)条「癸丑。遣員外右中弁從四位下大伴宿祢伯麻呂。攝津大進外從五位下津連眞麻呂等於大宰。問新羅使人朝之由。」
- 47) 『続日本紀』卷 30、宝龜元年(770)3 月丁卯(4 日)条「丁卯。初問新羅使來由之日。金初正等言。在唐大使藤原河清。學生朝衡等。属宿衛王子金隱居歸郷。附書送於郷親。是以。國王差初正等。令送河清等書。又因使次。使貢土毛。」
- 48) 申澄植 1981『三国史記研究』一潮閣。
- 49) 『三国史記』卷 9、新羅本紀、惠恭王 6 年 冬 12 月条「十二月侍中隱居退、伊浪正門爲侍中。」
- 50) 平澤加奈子 2006「八世紀後半の日羅關係: 宝龜 10 年新羅使を中心に」『白山史学』42、東洋大學白山史學會、51 頁。
- 51) 使節のルートにのせて書簡を日本へ伝送してくる例は、同じく藤原清河が 759 年に渤海国の官人に託した例にみえる(『続日本紀』卷 22、天平宝字 3 年 10 月辛亥条、4 年正月丁卯条)。
- 52) 濱田耕策 2012、前掲書、381 頁。
- 53) 銭起は新羅金城に留まり日本には至らなかったため、新羅王が金初正に命じて日本に伝送してきた背景があるとみている(濱田耕策 2012、前掲書、382~383 頁)。
- 54) 『三国史記』卷 9、新羅本紀、惠恭王 5 年 5 月条「夏五月(中略)命百官各舉所知。」
- 55) 이기봉 2018「신라 혜공왕대의 薦擧와 災異」『新羅文化』51、東國大学校新羅文化研究所、154 頁。
- 56) 『三国史記』卷 15、高句麗本紀、太祖王 66 年条; 卷 16、高句麗本紀、故國川王 13 年条; 卷 17、高句麗本紀、西川王 11 年条; 卷 17、高句麗本紀、烽上王 5 年条
- 57) 『三国史記』卷 1、新羅本紀、炤智麻立干 14 年条
- 58) 이기봉 2018、前掲文、155 頁。
- 59) 『続日本紀』卷 30、宝龜元年(770)3 月丁卯(4 日)条「又問。新羅貢調。其來久矣。改稱土毛。其義安在。對言。便以附貢。故不稱調。」

- 60) 新羅使が「土毛」と称した理由は、入京を願わなかったためそのように称したとの指摘がある。日本の貴族たちが将来した品目を大宰府（博多）にて貿易可能だったとするのなら、入京はせずに大宰府で貿易のみを行い帰国する意図があった可能性を示唆する（김은숙 1991 「8 세기의 新羅와 日本의 關係」『国史館論叢』29、128 頁）。これは新羅使の交易的側面を強く重視し考察された見解であるといえるが、「土毛」と称すること、新羅使の交易的側面については別の視点での考察が必要ではないかと思われるが、この点については今後の課題としたい。
- 61) 『続日本紀』巻 30、宝亀元年（770）3 月丁卯（4 日）条「但進唐國消息。并在唐我使藤原朝臣河清等書。嘉其勤勞。仰大宰府安置饗賜。宜知之。賜國王祿絁廿五疋。絁一百絁。綿二百五十屯。大使金初正已下各有差。」
- 62) 『続日本紀』巻 30、神護景雲 2 年（768）10 月 甲子条「賜左右大臣大宰綿各二万屯。大納言諱、弓削御淨朝臣清人各一万屯。從二位文室真人淨三千屯。中務卿從三位文室真人大市、式部卿從三位石上朝臣宅嗣四千屯。正四位下伊福部女王一千屯。爲買新羅交關物也。」
- 63) 濱田耕策 2012、前掲書、380 頁。
- 64) 山崎雅稔 2007 「新羅国執事省牒からみた紀三津『失使旨』事件」木村茂光編『日本中世の権力と地域社会』吉川弘文館。
- 65) 濱田耕策 2012、前掲書。
- 66) 菅沼愛語 2013 『7 世紀後半から 8 世紀の東部ユーラシアの国際情勢とその推移—唐・吐蕃・突厥の外交關係を中心に—』溪水社、249 頁。
- 67) 『三国史記』巻 9、新羅本紀、景德王 15 年（756）夏 4 月条
- 68) 日本が渤海を通して唐の情報を得ていた代表的な例として、日本は渤海經由で安史の乱勃発の事実について知った。これは、帰国した遣渤海使である小野田守によって日本へ初めてもたらされた（『続日本紀』巻 21、天平宝字 2 年（758）12 月戊申条）。また藤原清河は、759 年には渤海国の官人に書簡を寄託して日本に送っている（『続日本紀』巻 22、天平宝字 3 年 10 月辛亥条；同 4 年正月丁卯条）。このようにこの時期は、情報伝達のみだけでなく、書簡の伝送においても新羅を通したルートではなく、渤海經由であった。
- 69) この時期の唐を背景とした渤海関係研究は数多くある。代表的な研究として（濱田耕策 1995 「留唐学僧戒融の日本帰国をめぐる渤海と新羅」『日本古代の伝承と東アジア』吉川弘文館；趙二玉 2003 「8 世紀 中葉 日本 の遣唐使と 渤海」『韓國 思想과 文化』20；小宮秀陵 2011 「8 세기 新羅・渤海의 情報伝達과 日本 의 對唐外交 —遣唐使 연구의 비관적 검토를 위하여」『韓日關係史研究』38、韓日關係史学会；濱田耕策 2012、前掲書；浜田久美子 2015 「藤原仲麻呂と渤海 —遣唐使藤原清河の帰国策をめぐる—」『法政史学』83、法政大学史学会；구나희 2017 「발해와 일본의 교류」한국학중앙연구원출판부）が挙げられる。
- 70) 石井正敏 2001 「初期日本・渤海交渉における一問題」『日本渤海関係史の研究』吉川弘文館；酒寄雅志 2001 「八世紀における日本の外交と東アジアの情勢—渤海との關係を中心として—」『渤海と古代の日本』校倉書房；河内春人 1995 「東アジアにおける安史の乱の影響と新羅征討計画」『日本歴史』561、吉川弘文館。
- 71) 浜田久美子 2015、前掲文、43 頁。
- 72) 『続日本紀』巻 33、宝龜 5 年（774）3 月癸卯（庚子朔 4 日）条「是日。新羅國使礼府卿沙浪金三玄已下二百卅五人。到泊大宰府。遣河内守從五位上紀朝臣廣純。大外記外從五位下内藏忌寸全成等。」
- 73) 『続日本紀』巻 33、宝龜 5 年（774）3 月癸卯（庚子朔 4 日）条「問其來朝之由。三玄言曰。奉本國王教。請修舊好每相聘問。并將國信物及在唐大使藤原河清書來朝。」
- 74) 『続日本紀』巻 33、宝龜 5 年（774）3 月癸卯（庚子朔 4 日）条「問曰。夫請修舊好每相聘問。乃似立礼之隣。非是供職之國。且改貢調稱爲國信。變古改常。其義如何。」
- 75) 『続日本紀』巻 33、宝龜 5 年（774）3 月癸卯（庚子朔 4 日）条「又三玄本非貢調之使。本國便因使次。聊進土毛。故不稱御調。」
- 76) 濱田耕策 2012、前掲書、385 頁。
- 77) 李基白、1974、前掲書、236 頁。
- 78) 金良相と金邕はどちらも王党派の人物で「聖徳大王神鐘銘」を鑄造したという点を鑑みると、中代王室最後の人物であるとするべきで、両者の下代的性格に懐疑的な意見もみられる（이영호 2014、前掲書、167~169 頁）。
- 79) 金壽泰 1996、前掲書、115 頁。
- 80) 『旧唐書』巻 199 上、新羅伝；『三国史記』巻 9、新羅本紀、恵恭王条；『冊府元龜』巻 970 外臣部、朝貢；『冊府元龜』巻 975 外臣部、褒異
- 81) 『続日本紀』巻 33、宝龜 5 年（774）3 月癸卯（庚子朔 4 日）条「殊無礼數。宜給渡海料。早速放還。」
- 82) この書簡伝送については、新羅側に何らかの工作があったという指摘もある（増村博 1988 『遣唐使の研究』同朋舎、246 頁）。藤原清河は、『日本紀略』延暦 22 年（803）3 月丁巳（6 日）条によると、大暦 5 年（770）正月に崩御したとの記事がみられる。この記事は追贈記事と阿倍仲麻呂伝の末尾が合体したものであるため、

大暦5年に亡くなったのは清河ではないと考え、実際に清河が亡くなったのは773年頃であるとの見解も示されている（長野正 1976『藤原清河伝について その生没年をめぐる疑問の解明』『古代・中世の社会と民族文化』和歌森太郎先生還暦記念論文集編集委員会編、弘文堂）。大暦7、8年の新羅の遣唐使が唐から書簡を持ち帰ったとの記載はないが、これを新羅側の工作とみることに関しては慎重な検討が必要であると思われる。

- 83) 濱田耕策 2012、前掲書、385頁。
- 84) 恵恭王代の内乱が終結すると同時に王権も安定し、新羅は日本と緊密な関係を結ぶ必要が無くなり新羅使も終焉にむかったとの指摘がある（酒寄雅志 1984、前掲文）。もちろん、中代の終焉とともに恵恭王代の内乱は終結することとなる。しかし『三国史記』の史料をみるに下代初期を新羅国内の情勢が落ち着いていた時期とは言い難く、宣徳王代の政権は非常に不安定であったとの指摘もある（金壽泰 1985「新羅 宣徳王・元聖王의 王位継承」『東亜研究』6、302頁）。そのため、下代に入り新羅使という対日交渉の手段が急に見えなくなる点に關しては、別の立場からの考察が必要であると考え、この点については今後の課題としたい。
- 85) 壬子、遣唐第四船來泊薩摩國甌嶋郡。其判官海上眞人三狩等漂着耽羅嶋、被嶋人略留。但録事韓國連源等、陰謀解纜而去。（下略）
- 86) 甲申、以大宰少監正六位上下道朝臣長人爲遣新羅使。爲迎遣唐判官海上三狩等也。
- 87) 丁丑、大宰府言、遣新羅使下道朝臣長人等、率遣唐判官海上眞人三狩等來歸。
- 88) 冬十月乙巳、勅大宰府、新羅使金蘭蓀等、遠涉滄波、賀正貢調。其諸蕃入朝、國有恒例。雖有通狀、更宜反復。府宜承知研問來朝之由、并責表函。（下略）
- 89) 己巳、遣勅旨少輔正五位下內藏忌寸全成於大宰府、問新羅國使薩浪金蘭蓀入朝之由。
- 90) 己巳、天皇御大極殿受朝。唐使判官高鶴林、新羅使薩浪金蘭蓀等、各依儀拜賀。
- 91) 辛未、新羅使獻方物。仍奏曰、新羅國王言、夫新羅者、開國以降、仰賴聖朝世世天皇恩化、不乾舟楫、貢奉御調年紀久矣。然近代以來、境內紆寇、不獲入朝。是以謹遣薩浪金蘭蓀、級浪金巖等、貢御調兼賀元正。又訪得遣唐判官海上三狩等、隨使進之。又依常例進學語生。」參議左大弁正四位下大伴宿祢伯麻呂宣勅曰、夫新羅國、世連舟楫供奉國家、其來久矣。而泰廉等還國之後、不修常貢、每事无禮。所以頃年返却彼使、不加接遇。但今朕時、遣使修貢兼賀元正。又搜求海上三狩等、隨使送來。（中略）是日宴唐及新羅使於朝堂。賜祿有差。
- 92) 壬申、授新羅使薩浪金蘭蓀正五品上。副使級浪金巖正五品下。大判官韓奈麻薩仲業、少判官奈麻金貞樂、大通事韓奈麻金蘇忠三人、各從五品下。自外六品已下各有差。並賜當色并履。
- 93) 癸酉、宴五位已上、及唐新羅使於朝堂。賜祿有差。
- 94) 壬午、賜唐及新羅使射及踏歌。
- 95) 新羅使還蕃。賜璽書曰、天皇敬問新羅國王。朕以寡薄、纂業承基。理育蒼生、寧隔中外。王自遠祖、恒守海服、上表貢調、其來尚矣。（中略）今此蘭蓀猶陳口奏。理須依例從境放還。但送三狩等來。事既不輕。故修賓礼以荅來意。王宜察之。後使必須令齎表函以礼進退。（中略）今因還使附荅信物。（下略）
- 96) 『続日本紀』天平勝宝4年（752）正月条
- 97) 平澤加奈子 2006、前掲文、54~55頁。
- 98) 森公章 1988「古代日本における対唐観の研究—“対等外交”と国書問題を中心に—」『国史研究』84、弘前大学。
- 99) 森公章 1998『古代日本の対外認識と通交』吉川弘文館。
- 100) 平澤加奈子 2006、前掲文、55頁。
- 101) 平澤加奈子 2006、前掲文、45頁。
- 102) 浜田久美子、2014、前掲文。
- 103) 浜田久美子、2014、前掲文、1~4頁。
- 104) 『三国史記』卷43、列伝3、金庾信下
- 105) 濱田耕策 2012、前掲書。
- 106) 『続日本紀』卷25、天平宝字8年（764）7月甲寅（19日）条

(参考文献)

『三国史記』『三国遺事』『続日本紀』『冊府元龜』『旧唐書』『新唐書』
「聖徳大王神鐘銘」

<単行本>

(韓国語)

구나희 2017『발해와 일본의 교류』한국학중앙연구원출판부

권영오 2011『新羅下代政治史研究』혜안

- 金壽泰 1996 『新羅中代政治史研究』 一潮閣
 李基東 1980 『新羅骨品社會와 花郎徒』 韓國研究院
 李基白 1974 『新羅政治社會史研究』 一潮閣
 이문기 2015 『신라하대 정치와 사회 연구』 학연문화사
 李仁哲 1993 『新羅政治制度史研究』 일지사
 李仁哲 2003 『신라 정치경제사 연구』 일지사
 이영호 2014 『신라중대의 정치와 권력구조』 지식산업사
 申滢植 1981 『三國史記研究』 一潮閣
 申滢植 2004 『統一新羅史研究』 韓國學術情報
 朴海鉉 2003 『新羅中代政治史研究』 國學資料院
 선석열 2015 『신라 왕위계승 원리 연구』 해안
 신정훈 2010 『8 세기 신라의 정치와 왕권』 韓國學術情報
 하일식 2006 『신라 집권 관료제 연구』 연세국학총서 63, 해안
 한준수 2012 『신라 중대 율령정치사 연구』 서경문화사
 (日本語)
 石井正敏 2001 『日本渤海關係史の研究』 吉川弘文館
 井上秀雄 1974 『新羅史基礎研究』 東出版
 酒寄雅志 2001 『渤海と古代の日本』 校倉書房
 菅沼愛語 2013 『7世紀後半から8世紀の東部ユーラシアの國際情勢とその推移 一唐・吐蕃・突厥の外交關係を中心に』 汲水社
 田村圓澄 1990 『大宰府探究』 吉川弘文館
 濱田耕策 2012 『新羅國史の研究 一東アジア史の視点から』 吉川弘文館
 濱田耕策 2013 『朝鮮古代史料研究』 吉川弘文館
 増村博 1988 『遣唐使の研究』 同朋舎
 森公章 1998 『古代日本の對外認識と通交』 吉川弘文館

〈論文〉

(韓國語)

- 김선숙 2007 「新羅惠恭王代(765~780)의 国内情勢와 対日外交」 『精神文化研究』 30-4, 韓國精神文化研究所
 金壽泰 2011 「신라 혜공왕대 만월부인의 섭정」 『新羅史學報』 22, 新羅史学会
 金壽泰 1985 「新羅 宣德王・元聖王의 王位繼承」 『東亞研究』 6, 西江大学校東亞研究所
 김은숙 1991 「8 세기의 新羅와 日本의 關係」 『國史館論叢』 29, 國史編纂委員會
 金昌謙 1995 「新羅 元聖王의 即位와 金周元系의 動向」 『阜村 申延澈教授停年退任 史學論集』 일월서각
 小宮秀陵 2011 「8 세기 新羅・渤海의 情報伝達과 日本의 對唐外交 一遣唐使 연구의 비판적 검토를 위하여」 『韓日關係史研究』 38, 韓日關係史学会
 南東信 1992 「聖德大王鐘銘」 韓國古代社會研究所編 『역주 한국고대금석문 Ⅲ』 가락국사적개발연구소
 박남수 2012 「신라 성덕왕대 상제 김순정과 대일교섭」 『新羅史學報』 25, 新羅史学会
 朴成熙 2001 「新羅 眞平王 즉위 前後 정치세력의 동향」 『韓國古代史研究』 22, 韓國古代史学会
 李基白 1993a 「新羅 專制政治의 成立」 『韓國史 轉換期의 문제들』 知識産業社
 李基白 1993b 「統一新羅의 專制政治」 『韓國史上的 政治形態』 一潮閣
 李基白 1995 「新羅 專制政治의 崩壞過程」 『學術院論文集人文社會科學』 24
 이기봉 2018 「신라 혜공왕대의 薦擧와 災異」 『新羅文化』 51, 東國大学校新羅文化研究所
 李晶淑 1994 「眞平王의 即位를 전후한 政局動向」 『釜山史學』 27, 釜山史学会
 李昊榮 1975 「聖王大王神鐘銘의 解釈에 관한 몇가지 문제」 『考古美術』 125
 이현주 2017a 「신라 중대 王母의 칭호와 위상 - 혜공왕대 만월태후를 중심으로 -」 『韓國古代史研究』 85, 韓國古代史学会
 이현주 2017b 「신라중대 만월태후의 자기인식과 ‘성덕대왕신중」 『여성과학사』 27 한국여성사학회
 全德在 1992 「新羅 祿邑制의 性格과 그 變動에 관한 연구」 『역사연구』 1
 全德在 1997 「新羅 中代 對日外交의 推移와 眞骨貴族의 動向 - 聖德王~惠恭王를 중심으로 -」 『韓國史論』 37, 서울大学校國史学科
 전덕재 2007 「신라중대」 『한국고대사연구의 새동향』 서경문화사
 曹凡煥 2014 「신라 中代末惠恭王의 婚姻을 통하여 본 政局의 변화」 『新羅文化』 43, 東國大学校新羅文化研究所
 趙二玉 2003 「8世紀 中葉 日本의 遣唐使와 渤海」 『韓國 思想과 文化』 20

- 최홍조 2004 「신라 애장왕대의 정치변동과 김언승」 『韓國古代史研究』 34、韓國古代史学会
(日本語)
- 河内春人 1995 「東アジアにおける安史の乱の影響と新羅征討計画」 『日本歴史』 561、吉川弘文館
- 河内春人 2000 「新羅使迎接の歴史的展開」 『ヒストリア』 170、大阪歴史学会
- 酒寄雅志 1984 「日羅交渉終焉をめぐる事情」 『朝鮮史研究会会報』 74、朝鮮史研究会
- 鈴木靖民 1967 「金順貞・金邕論—新羅政治史の一考察」 『朝鮮學報』 45、朝鮮學會
- 長野正 1976 「藤原清河伝についてその生没年をめぐる疑問の解明」 『古代・中世の社会と民族文化』 和歌森太郎先生
還暦記念論文集編集委員会編、弘文堂
- 森公章 1988 「古代日本における対唐観の研究—“対等外交”と国書問題を中心に—」 『国史研究』 84、弘前大学
- 浜田久美子 2014 「遣新羅使再考」 『續日本紀研究』 408、續日本紀研究会
- 浜田久美子 2015 「藤原仲麻呂と渤海—遣唐使藤原清河の帰国策をめぐる一—」 『法政史学』 83、法政大学史学会
- 平澤加奈子 2006 「八世紀後半の日羅関係 宝亀 10 年新羅使を中心に」 『白山史学』 42、東洋大學白山史學會
- 山崎雅稔 2007 「新羅国執事省牒からみた紀三津『失使旨』事件」 木村茂光編 『日本中世の権力と地域社会』 吉川弘
文館